

# 福岡県朝倉市における谷止の例 —ホウキ谷水道（谷止）—

中島 圭<sup>1</sup> ・ 寺村 淳<sup>2</sup>

<sup>1</sup>朝倉市教育委員会 文化・生涯学習課文化財係（〒838-0068 福岡県朝倉市甘木 198-1）

E-mail:bunka-zai@city.asakura.lg.jp

<sup>2</sup>正会員 九州大学工学研究院 学術研究員（〒819-0395 福岡県福岡市西区元岡 744）

E-mail :j.teramura@civil.kyushu-u.ac.jp

福岡県朝倉市檜原にあるホウキ谷水道は石積による谷止工である。高さ約 10m、幅約 3m、範囲に石積を行い、流水による谷の深化や土砂災害を防ぐ目的を持つ。PhotoScan による 3D スキャニングを行い、この遺構の機能や構造を検証するとともに、築造年代を考察した。福岡県においてはまだ関心の低い近世～近代の土木遺産を調査し、今後の研究の一助としたい。

**Key Words:** valley closing, Houkidani Suido

## 1. はじめに

福岡県朝倉市にある「女男石護岸施設」は、平成 28 年 3 月に福岡県指定史跡に指定された。女男石護岸施設は近世初頭に築造された治水・利水施設である。県道拡幅工事の計画により消滅の危機に瀕したが、歴史的価値を再評価され、保存と史跡指定されるに至った。朝倉市教育委員会では、その歴史的価値の重要性が浸透していなかったことから保存が後手にまわり、工事計画変更が難航した反省から、市内の歴史的価値のある治水・利水施設の把握に努めている。こうした中で再評価したいのが「ホウキ谷水道」である。ホウキ谷水道に関する文書などの記録は残されていないが、福岡県朝倉市檜原の「ホウキ谷水道」は 1993 年に刊行された『甘木市遺跡等分布地図』甘木市文化財調査報告第 27 集に登場し、近代の遺構として紹介される<sup>1)</sup>。

著者らの現地踏査の際に、別所砂留等との類似性を指摘され、近代以前に時期が遡る可能性もあることから本稿で取り扱うに至った。本稿はホウキ谷水道の機能や意味を考察し、議論の俎上にのせることで、広く人々に周知し、遺構の保全を進める契機としたい。

## 2. 地理・歴史的環境

朝倉市檜原は英彦山系から端を発する小石原川が江川や秋月を抜け、女男石の隘峡部をへて平野部へと抜ける



図-1 ホウキ谷水道（谷止）の位置

扇状地の西側で、古処山から派生する山々の一つである経ヶ峰（202.9m）や小富士（355.7m）の山麓に位置している(図-1)。

遺構が所在する檜原は朝倉市でも有数の古墳が多く築造された地帯であり、主に古墳時代後期の群集墳が多く存在している。古代～中世にかけては宗教色の濃い地域である。薬神寺跡はかつて檜原山薬神寺東光院といい<sup>2)</sup>、彦山の末寺であったという。ここには今も小堂があり、延暦年中（782～806）に伝教大師が薬師 7 体を彫る前の試作品と伝えられる薬師仏が本尊である<sup>3)</sup>。虚空蔵寺跡では宝暦五年に経筒が掘り出されている（檜原血経）。その他、地名にその名残がみられることや開墾中に土器や仏像の出土が伝えられる。中世には山頂に山城が築かれ、茶臼山城や古城戸城、少し離れて小鷹城などが築かれ、秋月氏の家臣が城番を務めた。山麓の集落に

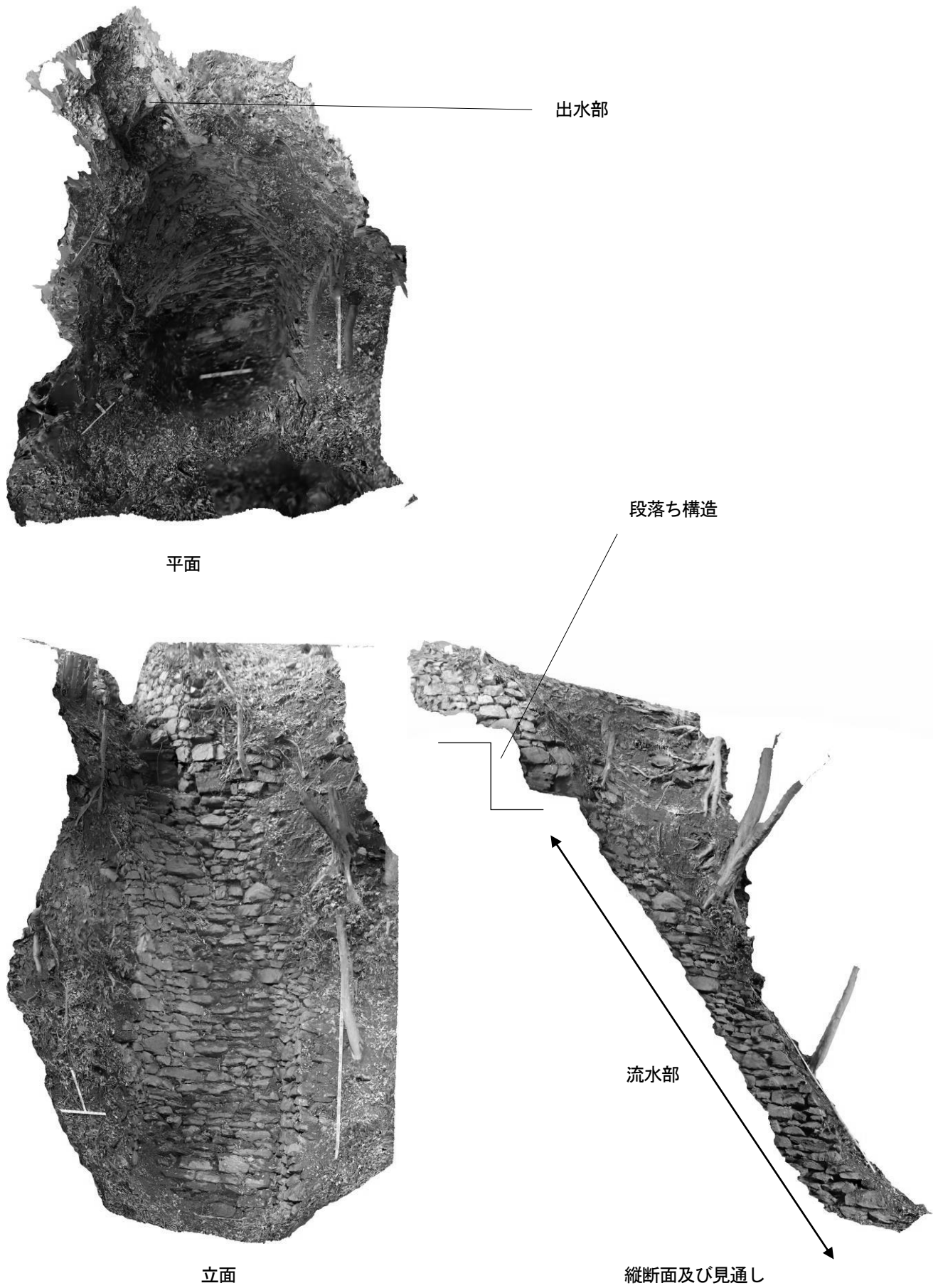


図-2 Agisoft PhotoScanによる展開画像（任意縮尺）

は「大倉種實之家臣 元祖 武井兵部左衛門 天正年中」なる石碑が明治に建てられている。大倉は大蔵のことであり、秋月氏の本姓で、「大倉種實」は秋月種実のことである。秋月氏の家臣が居住し、今もその子孫が居住していることがうかがえる。豊臣秀吉の九州平定後、秋月氏は日向財部へ移封されるが、家臣の一部はここに留まり、江戸時代には有力農民として庄屋となっていた<sup>4)</sup>。ホウキ谷水道はこうした古来より続く集落の中に存在している。

### 3. ホウキ谷水道（谷止）について

#### (1) 機能と構造

PhotoScan による 3D スキャニングを行い、3D データ化を実施した（図-2）。それにより石積構造だけでなく、縦方向・横方向の断面まで可能になった。ホウキ谷水道（谷止）は谷奥の崖面の高さ約 10m、幅 3m の範囲に石積を行い、水流による谷の浸食を防ぐために構築されたものである。おおそ斜面の傾斜角度は  $60^{\circ}$  ～  $70^{\circ}$  である。

谷奥を谷の局面に合わせて石貼りし、下部は断面コの字に石積する構造である（写真-1）が、上部の出水部は幅が狭く、下部は広くなる。から谷や集落で集約された水は上部の出水部（写真-2）を経て流水部へ流されるが、一段の段落ちを経て流水部へ流される（写真-3）。段落ち構造にすることで、一度水流の力を弱めていると推測される。石は地元産の緑泥片岩を主として用いている。緑泥片岩は薄く方形に割れやすく、古墳の石室築造に際しても盛んに使用された、石積しやすい石材である。長辺を山に差し込むように小口積し、石積の強度を高める構造をしている。流水部の中～下部の側面の石積は流水部の床面を挟み込むように積まれ、流水が側面の石積の下に入り込むことが原因で側面が崩落することを防ぐ構造をしている（写真-4）。

この上に連なる谷は「から谷」と呼ばれ、現在常時流水があるわけではなく、降雨時などに水が流れる。から谷とホウキ谷水道の間には平場があり、中世～近代には集落が存在した。降雨はから谷や集落を経て、ホウキ谷水道に集まるようになっており、ホウキ谷水道はそうした降雨時の水流に対する備えであり、水流により谷の深化を防ぎ、上の集落を守る役目を持っていたと考えられる。

別所砂留など福山地域で見られる砂留との違いは、砂留が堰堤状をなし、堰堤や流水部に石積しているのに対し、ホウキ谷水道は流水部の保護と浸食の防止に重点が置かれている。



写真-1 ホウキ谷水道（谷止）



写真-2 上部の出水部



写真-3 出水部の段構造

## (2) 築造時期の推定

先述のように築造時期を示す明確な記録は残されていない。地元の古老の話では「昔からあった」ということであり、少なくとも現代の産物でないことは明らかである。

石積は方形に近い天然石を小口積している。上段に展開する集落跡の石垣と積み方が類似しているため、近世～近代の築造と考えられる。この集落跡を踏査すると、中世～近世の土器や陶磁類が主体であることから、集落跡の平地造成も中近世期に行われたものと推測される。近くを流れる小石原川や秋月城下町を流れる野鳥川は、近世に堰や橋の下流に護床工として石貼りを施しているが、そうした発想から応用されたものと思われる。上述のように、秋月氏の家臣で、江戸時代には庄屋であった武井家の居住した地区であり、武井家の関与のもとに築造された可能性が考えられる。

ちなみに「ホウキ谷」の名についてであるが、この名前の由来は明確でない。ホウキ谷水道が位置する場所は檜原の「中谷」である。上部に連なる谷も先述のように「から谷」であり、尾根を隔てて隣接する西側の谷を「柚木谷」、東側の谷を「ひろ谷」という。戦国期に近くにある小鷹城（梨ノ木城）の城番を務めた深江氏は深江伯耆守を名乗っていたようであるが、これに由来するものであろうか。今後の課題としたい。

## 4. 結論

ホウキ谷水道は近世～近代に築造された石積の谷止である。損傷も少なく今も現役で機能しており、当地域の土木遺産と言えるものである。今後は技術の系譜や類例をあたり、更なる研究の進展と文化財的価値の普及に努めたい。



写真-4 流水部の床面石材を側面の石材が挟み込む

謝辞：本稿執筆にあたり、川端正夫、松尾宏にご教示賜った。心から感謝したい。

## 参考文献

- 1) 甘木市教育委員会：『甘木市遺跡等分布地図』,p6,1993
- 2) 貝原益軒編 伊東尾四郎校訂：『筑前國續風土記』,p211,文献出版,1988
- 3) 福岡県史編纂委員会：『福岡県史 近代資料編 福岡県地理全誌(四)』,p541-p546,福岡県,1991
- 4) 甘木市史編さん委員会：『甘木市史上巻』,p607,甘木市,1982

(2018.4.9 受付)